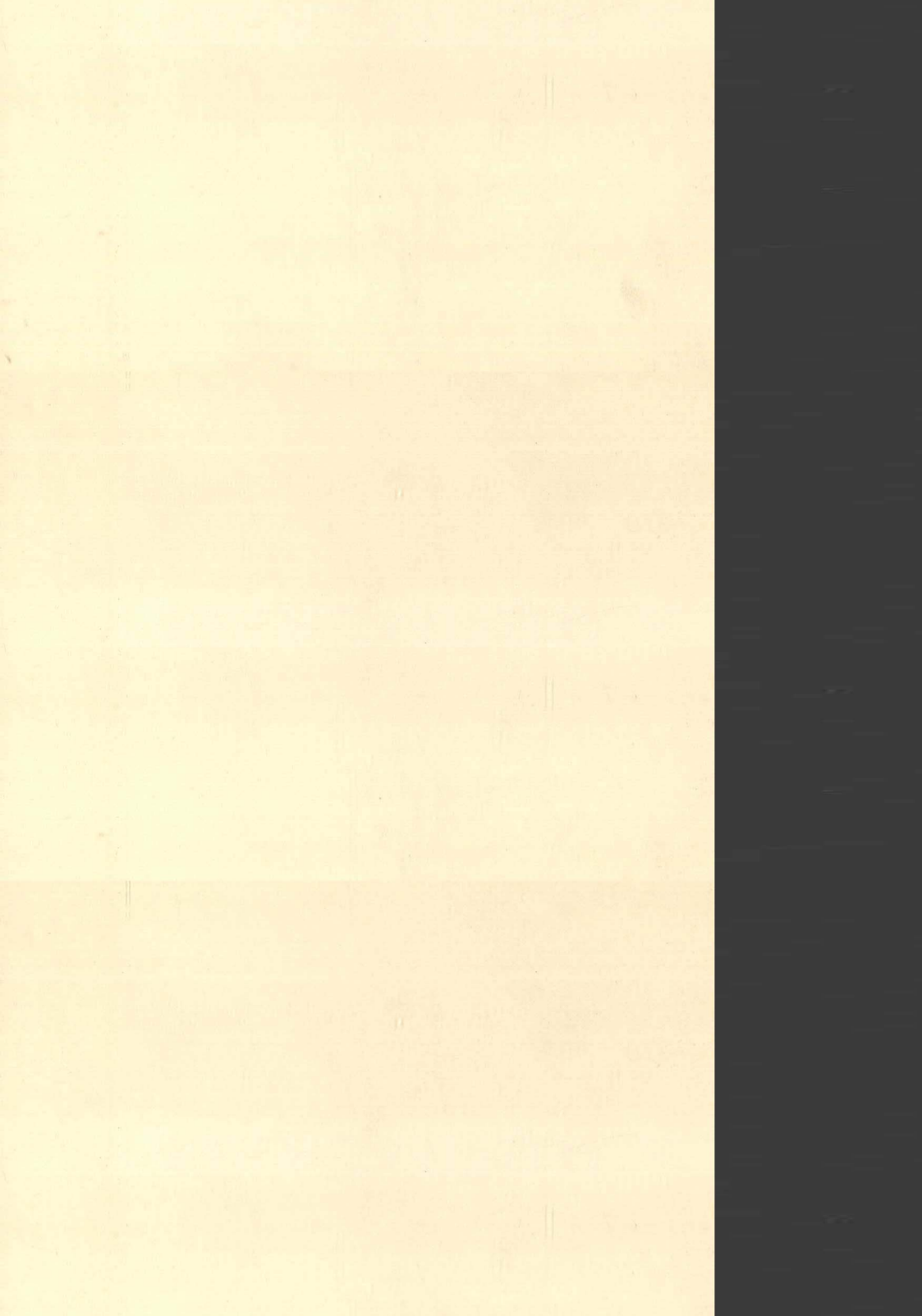




正宗白鳥全集

小説二

新潮社版

正宗白鳥全集 第二卷

昭和四十二年九月三十日 發行
昭和五十一年八月三十日 セット版

全十三卷セット定價五二〇〇〇圓

著 者 正 宗 白 鳥

發行者 佐 藤 亮 一

印刷所 大日本印刷株式會社

製本所 新宿加藤製本

發行所 株式會社 新 潮 社

162 東京都新宿區矢來町七一
電話 業務部〇三三六六五一二一
編集部〇三三六六五四一二
振替 東京四一八〇八番

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

正宗白鳥全集 第二卷

編集

中島河太郎

山本健吉

中村光夫

小林秀雄

監修

河上徹太郎

第二卷 目次

毒 九

お　　今 九

心中未遂 一九

半生を顧みて 一五

まぼろし 二〇

入江のほとり 二三

催眠薬を飲むまで 二七

牛部屋の臭ひ……………二九六

死者生者……………三四

老婆殺し……………四六

すべての終り……………三六

白晝夢……………四六

毒婦のやうな女……………四六

解題……………中島河太郎・五七

小說
(二)

「——明日午後晴雨に關らず、是非お訪ね申べく候につき、御在宅なさるやう願上候」と云ふ、湯原からの手紙を見ると、香取元一は眉を蹙めた。靜かな沼の水に小石一つ投込まれたやうな氣がした。

春の末頃からの憂鬱症が、夏になつて激しくなつてゐたので、彼れは暫らく懇意な人との往來も絶ち、行馴れた處へも足踏みせず、能ふ限り人を避けて、自分の部屋を修道院のやうにして、心を落着けようとしてゐたが、この手紙一つでそれが最早破れさうに見えた。其處の明るい障子に醜い人影、煩さい世の影が差したやうに思はれた。

毒

一

が、その人を避ける譯には行かなかつた。で、「お待ち申してゐます」と、折返して返事を認めたと、ふと思つて、「私の部屋は取散らしてゐますから、近所の××軒へお出下さい。正午過ぎに行つてお待ち申してゐます」と、書直した。彼れはせめて自分の部屋だけは今暫らく濁したくなかつた。蜘蛛の巣や鼠の糞で汚されようとも、繁吹に窓を濡されようとも構はないが、人臭い息で汚したくはなかつた。

深夜に目醒めると、幾多の鼠が壁を攀ち障子を動かし、鋭い聲を立ててゐる。彼れは見えぬ鼠の姿を暗闇の中に描きながら、見えぬ知人の姿を心に浮べる。荒寺に遁籠つた弱武者が經て來た事を思出すやうに思出して見る。と、枕近く、ツと鳴聲立てて駈けて來る鼠の足音に驚かされるやうに、深く知合つてゐた或男や或女の不氣味な素振や言葉が、突如に其處へ生々と現はれて心を驚かすこともあつた。

今その人達は何處に寝て、どんな夢を見てゐるだらう。何を企んでゐるだらう？

彼れは身に染みる夜の淋しさ不氣味さに慄いて、明るい光に包まれた人の笑顔が慕はしかつたが、さて誰れに會ひたいと云ふ當てはなかつた。分隔てなく交つて、可成りの執着をも持つてゐた男や女も、この頃の夜の思出には、只色の褪せた興のない單調な姿となつて現はれて、何故あんなに執着してゐたのかと怪まれるやうになつてゐた。そして、そんな人

達に接してゐたため、自分の目も鼻も皮膚も、疲られ荒らされて、心の艶を失ふやうになつたのだと思はれた。

彼れは今までの生活の忌はしくもあり、堪へがたくもなると共に、僅かな報酬のために忙しかつた職業をも不意に止めてしまつた。自分のものとして親から授けられた少しの財産は略々使ひつくしてはゐるものの、半年や一年は遊んでゐても餓死をしさうではない。で、それ一つを手頼りなき世の手頼りとして、心も身體も休ませて、再び新しい力の湧いて來るのを待つてゐた。

折々は新しい書物をも讀んだ。子供の時分温かい縁側で夢心で物語を讀耽つてゐたやうに、朝日の流れ込む疊の上で、珍らしい書物を開いて見た。散歩するにも、人通りの少ない静かな町を選んだ。屢々程近い郊外へ出て、木蔭に憩うたり、大根畠や田の畦を矢鱈に歩いたりして、都會の中の人と人との關係をつとめて頭から拭去らうとすることもあつた。

日を重ねるにつれて、彼れは佗しさの餘りに、竊かに下町の雑沓場へも出て行つた。芝居や寄席をも覗いて見た。しかし、咎人でもあるやうに、知人には近づかず、その目を避けるやうにしてゐた。下女とも浮世囃一つするではなく、家の中は何時も寂としてゐた。

彼れは或夜ふとこんなことを思つた。これで二年も三年も

何處へも出勤せず、知人の家へも顔出ししないでゐたならば、これまでの香取元一に對する世の人の好惡の念は自ら薄らいで、自分の名さへも忘られるかも知れない。忘られた自分は新に生れた人となつて、二十幾年の間付纏はれてゐた香取と云ふ名に累はされないで、自由自在の心のまゝの生活が出来るかも知れない。顛へつきたいやうに懐かしい新しい世界が其處に現はれて來るかも知れぬ。

さう思ふと、先祖代々の香取と云ふ名が堪へがたい程憎くなつた。この名を包んださまゝの記憶が忌はしくなつた。

たとひ人間に符牒が必要であつても、一つの名を名乗り通して、窮屈な思ひをしなくてもよい。祖父や父の忌はしい所行や、自分自身の愚かな陳腐な所行を聯想させるやうな香取と云ふ名を棄てて、新しい名をつけて見たい。

彼れは晴々しい顔立の女の紅い唇から異つた名によつて自分と呼ばれたかつた。晴々しい顔立をした男の口から異つた名によつて自分と呼ばれたかつた。

TとかSとかの褪せた唇から出る「香取さん」と云ふ聲は、最早血を湧立たす力を失つてゐる。

だが、湯原の手紙は稍々薄らぎかけた過去を意地悪く呼び寄せた。その見苦しい失策や、淺ましい行爲や、多くの知人には知られぬことまでも、湯原の頭には鮮かに刻まれてゐる。脇の下の痣でも腰の腫物の痕でも、彼れの目には残つて

ある。

で、香取はその手紙を見ながら、自分が古い衣服きものを脱ぎ棄てようとする場合の一番の強い邪魔物は、彼れ湯原であるやうに思つた。たとひ、自分が聖人君子に豹變ひょうぺんしようとも、天一坊に早變りしようとも、昔の汚れ衣ごうもを突付けて、化の皮を剥がうとするのは、彼れ湯原であると思はれた。どんなに異つた装ひを凝らしても、彼れは一目で自分を見現はすことが出来る。

「元一君、あの時はかうだつたねえ」と、彼れが鈍い聲で何氣なく云ふことも、嚇おどかされるやうに聞えて、身が縮こまることもあつた。

腹の中に惡意のない、むしろお人よしと云つていゝ男だと思ひながら、香取の目には自分の心を曇らすもののやうに見えた。で、久しくその家へは近づかないでゐたのだが、どんな用事があつて、わざ／＼訪ねて来るのだらう？ 暫らく誰れからも浮世嘲を聞かされず、自分の口も啞のやうに堅く噤つまれてゐたものを。

隠れ家の扉は湯原の手で開かれたくはなかつた。

二

香取は翌日久振りで、××軒の階子段はしどを上つた。

其處の二階は午後の濁つた日光を眞向まへむかひに受けて、眩しいほど明るかつた。疊の上に置かれた低いテーブルの白布しろふには處處黃ろい斑點しみがあつた。

彼れは乾いた口を一杯の苦い珈琲で濕して、そのテーブルに頬杖ついて、湯原を待つ間の退屈醒ましに、持つて來た書物を開いた。左程心を惹かれるでもなく、只白い滑かな紙に浮上つた鮮明な文字を、目先ににらせてゐるのに過ぎなかつたが、ふと、あるページに目が留まつた。心を籠めて同じ處を讀返した。そして、文字の間の人影を濃く心に浮べようとした。

その人はヴェニスヴェニスの貴婦人だつた。類稀るゐなる美人だつた。或時自分の身を古の名高い女神の彫像のやうに、美しい甲冑で装ひ、その姿をある名畫工に描かせた。若い美しい盛りに、かうして永久に自分の姿を世に留めて置いて、花の色の褪せるに先んじて、人の目から身を隠してしまつた。一度にてもその面影に接した者に、些ちしの衰へた様をも見せたくはなかつた。で、いよく今日を最後と自分で定めた日には、華美を極めた離別の宴を張つて、扮装よめびを凝らして其處へ現はれ、その翌日から、二三の召使ひを連れて、壁を廻らした庭園の中の靜かな家に蟄居した。そして、幾年も絶えて人に會ふことなく、只一人で靜かに一生を終るのを待つてゐた。家の内にはどの部屋にも鏡を置くことを許さない。で、次第に

自分で自分の顔をさへ忘れるやうになつた。親兄弟でも友人でも一步も此處の門を潜ることを許されない。

世の人にはこの貴婦人は昔の物語の美女のやうに思はれ出した。朽葉の散つた濕つた狭い道に立つて階上を見上げると、左右の窓は皆鎖され扉は釘付けにされてゐる。只一つ婢僕の通ふ路のみ残されて、其處から生きた死人への食物が運ばれてゐる。――

香取は永久に美しく生きんとする人間の可憐しい望みを思つた。永久に世の人に讃美されたい強い慾望を其處に見た。

その貴婦人は鎖されたる窓の中で、何を思ひ何を描いて、最終の日を待つてゐるだらう。幽かに洩れて来る戸外の馬車の音や人の騒ぎを聞いて、何を感じてゐるだらう。隙間洩る温かい光を見ても、庭の木の中に囀る雀の聲を聞いても、些しも心を動かさないでゐられるだらうか。籠の中に蓄へられて日數を経てゐる林檎が、昔の艶の失せて、日に日に萎びても、自ら悲まぬやうに、窓の中の女も次第に衰へる自分を、平氣で見てゐられるだらうか。

“Prisoner of Time” 書物の上の濃い黒い文字が、強く彼の目に映つた。何處かで見たことのある鎌を手にした西洋の神の姿が、ぼんやり思出された。その貴婦人の窓の側には、時の神が鎌を磨澄して待つてゐる。……彼は心の中でそんな繪をつくつてゐたが、やがて、書物を閉ぢて、目を上

げて煙草を吸ひ出した。壁に掛つてゐる卑しい裸體の寫眞版――おのれの醜い姿を露出しにして恥づる氣もない女の繪を見ることもなく見てゐたが、すると、ふと、自分の目で見たある實在の女の姿が記憶から浮出た。その繪の女やあの物語の女とは色合が違つて、生々しく實感を動かすやうに浮んだ。それは盲目の女だつた。

ある名高い會社の重役の一人娘で、脊丈がすうりとして、色が白くて目鼻立が鮮かで、多人數の中へ出ては際立つて目に付く女だつた。金持の娘らしく贅澤に育つてゐたが、學課の出來榮も人並勝れたほどだつた。所が十八の春一夜の中に、二つの目が一度に物を見る力を失つた。父親の惡疾を受けてゐたためだとかで、名醫に診せても何の甲斐もなかつた。

「從姉の縁談を聞いて焦れて／＼仕様がないうですつて。焦れ出すと、いゝ着物でも何でも引裂くんですよ」と、それを見て來た人から聞いたことがある。

白く揃つた前齒を袖口に當ててビリ／＼と噛裂くさうだ。側に仕へてゐる者も、稍々もすれば、端ない女らしくない舉動に愛想を盡かせて、お傷はしいと思ふ心も無くなるさうだ。が、その娘も心が落着いて機嫌がよくて、顔に淋しい微笑を浮べることがある。そんな日にはどうかすると新橋へ行つ

て見たいと云ひ出す。で、自ら進んで髪を結つて入浴して、家中の者に助けられて盛装して、ダイヤの指環や金鏈を燦かして馬車に乗る。迂回して日本橋から大通を、周囲の物音に耳を留めながら、停車場まで勇ましく駆けつけさせる。そして付添の女に手を引かれながら、待合室へ入つたり、プラツトホームに立つてゐたりして、悦しさうに時を過ごすことがある。

何が楽しいと云つて、その娘にはお粧飾して人中へ出るくらゐ楽しいことはなさうだと云はれてゐる。

せめては大勢の人に見られたさに、停車場まで出懸けて行く。「色氣づいてるから困るんですよ」と、噂を傳へた女が付足した。

「ぢや、早く婿を取つてやつたらいいでせう。金持だから幾らでも候補者があるでせう」と彼れが答へると、

「でも、誰れでもと云ふ譯には行きませんからね」

「盲人にでも男振のよし惡しが分るでせうか」

「さあ、周囲の者の話で感付くでせうね」

「あんな美しい盲人は盲人たるが故に、却つて一種の興味がある。……だけど、情が深過ぎて弱るでせうね」

彼れは座興のやうに何氣なく話した言葉を思出した。そして、今思ふと、その不具の女に對して、眞面目に心を寄せられさうな氣分になるのを覺えた。世の人の思出にのみ美しい

影を残して、戸鎖された窓の中に生きながらの木乃伊となつてゐる貴婦人の冷たい頬よりも、人臭い息と埃と油煙の間に、自分の醜い眼を曝してゐる女の燃ゆるやうな温かい唇の方が慕はしくなつた。

で、彼れはその盲目の女を今一度見たいやうな氣がした。

三

食事時を外れてゐるので、客の出入はなかつた。家の中は寂としてゐる。雀が窓近く來て頻りに囀つたり、羽音を立てたりしてゐたが、それが不斷のやうに單調な響しい聲ではなくて、靜まりかける彼れの空想を搖動かした。一羽は影を映して軒先を飛んで行つた。日光は次第に障子の下へ沈んで、黄ばんだ弱い色を映した。

香取は約束の時の餘程過ぎてゐるのに、待人の來もせねば、違約の通知をも齎さぬのをさして待遠しがりもせず、不平にも思はず、只快く靜かに暮れて行く秋の日を、茫然見てゐた。このまゝで湯原が來なければいゝやうな氣がした。その頃はしい言葉を聞かされなければと思はれた。今少しして日光が窓を離れたら、一人で食事をして此處を出て行かうと決めてゐたが、やがて、階子段に足音がした。穩かな部屋の空氣を搔亂すやうに慌しい音を立てて上つて來た。香取は夢

から醒めたやうに心を取直した。

「非常に遅れて済まなかつた、和泉町で話が面倒になつたから」と、湯原は息をはずませてテーブルの側に胡坐を掻いて、洋服の上衣を脱ぎながら、「急いだから暑い、今年は暑さが長かつたね」と云つて、部屋を見廻し、「君はよく此處へ来るんかね」

言葉付も慌しかつた。ポケットから「ゴールデンバット」を出して、爪の延びた指で吸口を嵌めて火を點けた。臭い匂ひが青い煙につれてその口から流れ出た。

香取は一度この煙草の惡毒い刺激に酔つてからは、その臭氣を嗅いでも逆付きさうな氣持になる。で、自ら煙を避けるやうにして後退りして、障子を開けた。早稻田の森の方まで鮮かに見渡された。窓の下では少女が麵麴屑を入れた籠を持つて、茫然往來を眺めてゐる。

「何か食べますか」と云つて、香取は窓から首を出してその少女を呼んだ。そして湯原が今にも言出しさうな要談の一刻でも、延びるのを望んでゐた。が、湯原は素振の忙しさうなのに似合はず、直ぐには用向きを口にしないので、この頃の世間の出來事を話したり、相手の近狀を訊いたりした。

「僕はこの頃は新聞も讀んでゐないんです、家に居るか、この近所を散歩するか、その外滅多に人にも會ひません。出來れば今年一杯かうして、何もしないで暮したいと思ひます」

と、香取は沈んだ聲で云つた。

「君も可成り忙しい思ひをしてゐたのだから、今年中ぐらゐ遊んでもいいさ。それだけの餘裕があるのは、僕等に比べて君は仕合せだよ。僕はこれで二十歳の時から自分の腕で飯を食つて來たんだが、三十五の今日まで、只の十日だつて氣儘に遊んでたことはないからねえ。今年はせめて一晩泊りでもいいから、君達と一緒に紅葉を見に田舎へ行つたらと思ふんだが、それも一寸六ヶ敷さうだ」

「池田に住んで大阪の郵便局へ通つてゐた時分には、休暇毎に箕面へ遊びに出掛けた」と、その溪間の紅葉の美しさを話出したが、香取は湯原の顔のあの時分と少しも違はぬことを思つてゐた。初めて下谷の下宿で會つた十年前に比べてもさしたる相違が見えぬやうだ。浮世の塵を浴びて來てゐながら、その濃い眉と黄ばんだ細い眼と脂切つた無神經らしい肥つた頬とは時の腐蝕を受けてゐない。

「君は病氣と云ふものを知らないでせう」

香取はやがて前に置かれた麵麴を裂きながら羨ましさうに相手を見上げて訊いた。

「さうでもないね、これで生身だから」と、湯原は肌の寒さを感じて上衣を着て、「僕もこの頃はどうかすると頭の痛むことがあるんだよ。身體の調子が少し狂つて來たらしい」と、眉を顰めて首を捻つた。